

2026 年 10 月 11 日（聖霊降臨後第 20 主日、A 年特定 23）

メッセージ

「感謝と賛美はわたしたちの務めです」

（マタイによる福音書22:1-14）

司祭ヨセフ太田信三

今週も主イエスは、祭司長や長老たちに向けてたとえを語ります。最初の「二人の息子」では「洗礼者ヨハネ」が、続く「ぶどう園と農夫」では、隅の親石となる「主イエス」が登場しました。今日の第三のたとえでは、主イエスの復活と再臨の間を生きる「教会」について語られます。

主イエスが救いを完成するために再臨する日がやってきます。最後の審判というと「怖い」日を思い浮かべがちですが、主イエスと顔と顔を合わせる、喜びに溢れた日です。だからこそ今日のたとえでは「婚礼の祝宴」として描かれます。王なる神が心を尽くして用意してくださる喜びの宴こそ、再臨の日なのです。

王は準備を重ね、招いておいた人々を呼ばせますが、人々は来ようとしません。それでも王はもう一度迎えに行かせます。けれども人々は招きを無視し、家来たちを捕まえて殺してしまう者までいました。この「招いておいた人々」には、祭司長や長老たちをはじめ、神の招きを拒んできたイスラエルの民の姿が重なります。彼らは神のもたらす救いである祝宴に価値を見いださず、目先のことに身も心も注いでいます。殺された家来たちは、神の招きに背く人々によって殺された預言者たちだと読むことができます。しかし、招きを拒んだ人々は王の怒りに触れ、滅ぼされます。つまり、招かれているという立場だけで、救いが保証されるわけではないのです。

王は三度目には、道で出会うすべての人を招くよう命じます。そして、「善人も悪人も」皆集まり、祝宴は客でいっぱいになりました。花婿である王子の登場を待つ人々の姿は、死んで復活した主イエスが再び来るのを待つ「教会」の姿を表しています。王はすべての人を招き、教会に迎えます。ただし、そこから追い出される人がいます。教会から「悪人」は排除されませんが、「礼服」を着ていない者は外の暗闇に放り出されてしまうのです。招かれた人々は、王の食事が最高のものであることに気づきました。「礼服を着ていない者」も、その一人です。けれども彼は、誰が招いた祝宴であるかをわきまえていませんでした。それをわきまえていたなら、王への敬意を表し、「礼服」を身に着けたはずだからです。つまり、神が期待することは、ただ食事の席に参加することではなく、招いてくださった方を知って、宴席に連なることなのです。それゆえ「礼服」とは、救いに招かれていることへの感謝だといえます。日々、神の恵みを感じ、その恵みをいただくなかで、感謝とともに生きることこそ、ふさわしい礼服をまとうことなのです。

わたしたちもまた、神の宴に招かれています。わたしたちにはすでに、神の大いなる愛と恵みが注がれているということです。その神さまへの感謝の気持ちを込めて礼拝に参加するなら、華美でなくとも、その心は自然とその姿に表れ、神さまに伝わることでしょう。